

「受賞者の声」

テーマ「職業能力開発の実践」

副題「作業標準を用いた電子機器組立て訓練の取組みについて」

独立行政法人 高齢・障害・求職者雇用支援機構

群馬職業能力開発促進センター 菊池 達也

優秀な応募論文が多い中、拙稿が栄えある「厚生労働大臣賞(入選)」に選ばれ、驚きと共に大変恐縮しています。取組みに協力してくれた同僚と丁寧に査読して頂いた審査委員に感謝すると共に、汗水流して一生懸命に訓練に励んだ受講者の皆さんに本賞を捧げたいと思います。

さて、論文の題名にある「作業標準」は、20世紀初め米国の「作業の研究」を起源とし、ムダを排除させ最も経済的な生産活動には無くてならないものです。

今回、ユニット訓練「電子機器組立て」の実習課題について、作業スピードと組立て品質のバランスを追及した作業標準を独自に作成しました。本作業標準では、作業手順を詳細に分析して、秒単位で標準時間を設定しました。標準時間はベテランの作業時間ではなく、受講生が習熟すれば到達できそうな時間を、実際の作業を観察して求めました。受講者は作業標準に標準時間を併記した作業標準書を活用して繰り返し課題を練習することにより、能率的に技能を習熟させました。また、作業標準を導入後、技能検定の合格率が上昇した結果からもその有用性が確認できました。訓練用に作成した作業標準の考え方は、他系の訓練でも参考になると思います。学生や社会人への技能訓練の振興に繋がれば望外の喜びです。

最後に恐れながら、一言申し添えます。職業訓練大学校の初代校長成瀬博士は、「技能と技術」誌の創刊号に寄稿された題目「技能の火 技術の火」の中で、「手のとどかない高い崖の上にあった技能と技術の研究というものが、実はそうではなくて、常日頃いつも出入りしている実習場や教室の、いたるところに存在している、まことに平易なものの中にある」と説かれ、半世紀を経た今日でも変わらないと思います。私は読者の皆様が拙稿をご一読されて「なんだ。この程度なら自分にもできる」と奮起されて、現場のテーマに取り組み、次回のコンクールに数多くの成果を提出されることを期待しています。このエネルギーこそが職業能力界を切磋琢磨させ、発展させ、真に「一億総活躍

社会」の実現に大きく貢献するものと確信しています。